

1 見「あらハル・あらハス・まみユ・ラル・る」

あらハル・あらハス…あらわれる。姿を見せる。

書ハ者心画也。心之所由見ハル也。可レ不レ敬セ乎。(慎思録)

書は心画なり。心の由りて見はる所なり。敬せざるべけんや。

《書は心の絵画である。書く人の心が書によってあらわれるものである。慎まないでよかるうか。》

まみユ…お目にかかる。

元帝ノ後宮既ニ多ク、不レ得ニ常ニ見コル。 (西京雜記)

元帝の後宮既に多く、常には見ゆるを得ず。

《元帝の後宮には宮女の数が多かったため、いつもお目にかかる機会があるとは限らなかった。》

ラル・る…される。受け身の助動詞。

信ニ而見レ疑ハ、忠ニ而被レ謗。 (史記・屈原賈生列伝)

信にして疑はれ、忠にして謗らる。

《うそを言っていないのに疑われ、まごころを尽くしているのに悪口を言われる。》

2 為「ためニ・たり・つくる・なす・ナル・ラル・る・をさム」の1

ためニ…のため。

父ハ為レ子ノ隠シ、子ハ為レ父ノ隠ス。直キコト在リ其ノ中ニ一矣。(論語)

父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り。

《父は子のために罪をかばって隠してやり、子は父のためにその悪いところを隠してかばう。正直というのはこのような父と子がかばい合うところにある。》

たり…である

爾ハ為リレ爾、我ハ為リレ我。(孟子)

爾は爾為り、我は我為り。

《お前はお前である、私は私である。》

つくる…つくる。

以テ二人ノ性ヲ一為ニスハ仁義ヲ一猶ホ下ニ杞柳ヲ一為ニ杯椽ヲ一上。(孟子)

人の性を以て仁義を為すは、猶ほ杞柳を以て杯椽を為るがごとし。

《人の本性で仁義をなし行おうというのは、ちょうど柔軟な柳を用いてまげものの器を作るようなものである。》

2 為の2

ナル・ナス…とする。する。

苟<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>レバ恒<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>、放<sup>シ</sup>辟<sup>ス</sup>邪<sup>ヲ</sup>、無<sup>キ</sup>レ不<sup>ル</sup>レ為<sup>シ</sup>己<sup>ニ</sup>。(孟子)

苟<sup>ク</sup>も恒<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>ければ、放<sup>シ</sup>辟<sup>ス</sup>邪<sup>ヲ</sup>、為<sup>シ</sup>己<sup>ニ</sup>のみ。

《人がもしも一定不変の道徳心がないならば、わがまま勝手にし放題をして、平気なのだ。》

らル・る…される。受身の助動詞

厚<sup>キ</sup>者<sup>ハ</sup>為<sup>レ</sup>戮<sup>ス</sup>、薄<sup>キ</sup>者<sup>ハ</sup>見<sup>レ</sup>疑<sup>ハ</sup>。(韓非子)

厚<sup>キ</sup>き者は戮<sup>ス</sup>せられ、薄<sup>キ</sup>き者は疑<sup>ハ</sup>はる。

《ひどい場合は殺され、軽い場合でも疑われる。》

をさム…おさめる。

小人<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>使<sup>シ</sup>レバ為<sup>シ</sup>二国家<sup>ヲ</sup>一 蓄<sup>シ</sup> 害<sup>ニ</sup>並<sup>ビ</sup>至<sup>ル</sup>。(大学)

小人<sup>ヲ</sup>をして之<sup>レ</sup>国家<sup>ヲ</sup>を為<sup>シ</sup>めしむれば、蓄<sup>シ</sup> 害<sup>ニ</sup>並<sup>ビ</sup>に至<sup>ル</sup>。

《つまらない人物に国家を治めさせたら、災害がみんなやってくる。》

3 之「これ」レの・ゆク」

これ（レ）…代名詞として何かを指している場合と、あまり意味のない場合がある。後に「ヲ・ニ」等の送りがある場合は「レ」を送らず、ない場合は「レ」を送るのが普通。

自<sup>レ</sup>朝廷<sup>ニ</sup>視<sup>ク</sup>レ之<sup>ヲ</sup>、何<sup>ゾ</sup>有<sup>ラ</sup>レ彼<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>哉<sup>。</sup> (日本外史)

朝廷より之<sup>ヲ</sup>を視<sup>ク</sup>れば、何<sup>ゾ</sup>彼<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>有<sup>ラ</sup>らんや。

《朝廷の立場からごらんになれば、どうして彼此の区別がありましたでしょうか。ないはずです。》

噫<sup>、</sup> 菊<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>愛<sup>ス</sup>、陶<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>鮮<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>レ聞<sup>ク</sup>。(周敦頤・愛蓮説)

噫<sup>、</sup> 菊<sup>ヲ</sup>を之<sup>レ</sup>愛<sup>ス</sup>するは、陶<sup>ノ</sup>の後<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>く有<sup>ル</sup>ること鮮<sup>ニ</sup>なし。

《ああ、菊を愛するというのは、陶淵明以後は聞くことが少ない。》  
の…助詞の「の」。連体修飾語や主語を表したりする。

今<sup>者</sup>、有<sup>リ</sup>二小<sup>人</sup>之<sup>言</sup>、令<sup>ム</sup>二将<sup>軍</sup>与<sup>レ</sup>臣<sup>有<sup>ラ</sup>レ</sup>二郤<sup>。</sup> (史記)

今<sup>者</sup>、小<sup>人</sup>の言<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>、将<sup>軍</sup>をして臣<sup>ト</sup>と郤<sup>有<sup>ラ</sup>シ</sup>む。

《今、つまらない人間の言葉があり、将軍を私と仲違いさせようとしています。》

ゆク…動詞。行く。

黄<sup>鶴</sup>楼<sup>ニ</sup>送<sup>リ</sup>孟<sup>浩</sup>然<sup>ノ</sup>之<sup>ク</sup> 広<sup>陵</sup>。(李白詩)

黄<sup>鶴</sup>楼<sup>ニ</sup>にて孟<sup>浩</sup>然<sup>ノ</sup>の広<sup>陵</sup>に之<sup>ク</sup>を送<sup>ル</sup>

《黄鶴楼で孟浩然が広陵に行くのを送る》

4 与「あづカル・あたフ・くみス・と・ともニ・よりハ・か・かな」の1

あづカル…関わる。関与する。

君子<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>三<sup>レ</sup>樂<sup>一</sup>。而<sup>ウ</sup>王<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>与<sup>カ</sup>存<sup>セ</sup>一<sup>焉</sup>。(孟子)

君子に三樂有り。而つして天下に王たるは与かり存せず。

《君子には三つの楽しみがある。しかしながら、天下に王となることはこの三つの楽しみの中に入っていない。》

あたフ…あたえる。日本語とほとんど同じ。

与<sup>ハ</sup>之<sup>ニ</sup>釜<sup>ヲ</sup>。(論語)

之に釜を与へよ。

《この者に釜を与えなさい。》

くみス…仲間になる。たすける。政府与党というときはこの用法。

天道無<sup>レ</sup>親<sup>レ</sup>常<sup>ニ</sup>与<sup>ス</sup>善<sup>人</sup>一。(老子)

天道親無し、常に善人に与す。

《天道は公平で特定の人に親しむということではなく、常に善人の味方をする。》

4 与の2

と・ともニ…と一緒。ともに。〜と。

臣<sup>ハ</sup>与<sup>ニ</sup>将<sup>軍</sup>一戮<sup>レ</sup>力<sup>ヲ</sup>而攻<sup>ム</sup>秦<sup>ヲ</sup>。(史記)

臣は將軍と力を戮せて秦を攻む。

《私は將軍と力を合わせて秦を攻めました。》

よりハ…よりは。比較・選択。

而<sup>与</sup>三<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>從<sup>ニ</sup>辟<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>一也<sup>レ</sup>豈<sup>ニ</sup>若<sup>レ</sup>從<sup>ニ</sup>辟<sup>レ</sup>世<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>一哉。(論語)

而其の人を辟くるの土に従はんよりは、豈に世を辟くるの土に従ふに若かんや。

《お前さんは、人（君主）を選び好みして仕えない人物（孔子）に従うよりは、世を避ける人物に従った方がよきはなかるうか。》

か・かな…か。〜だなあ。疑問・詠嘆の終助詞。

子曰<sup>ク</sup>「賜<sup>也</sup>女<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>予<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>多<sup>ク</sup>学<sup>シ</sup>而識<sup>レ</sup>之<sup>者</sup>一与<sup>ト</sup>。(論語)

子曰く、「賜や、女予を以て多く学びて之を識る者と為すか。」と。

《孔子が言われるには、「賜よ、お前は私のことをたくさん学んでそれをおぼえている者だと思っているのか。」と。》

5 夫「か・かな・かノ・それ」

か・かな…か。…だなあ。疑問・詠嘆の終助詞。

逝者如斯夫。不舎昼夜。 (論語)

逝く者は斯くの如きかな。昼夜を舎かず。

《過ぎゆくものはこの水の流れのよつなものか。昼も夜もやむことなく動いている。》

かノ…あの。例の。

是ノ故二悪ム夫ノ佞者ヲ。 (論語)

是の故に夫の佞者を悪む。

《これだからあの口達者なやつはきらいだ。》

それ…そもそも。いったい。

夫レ天地ハ万物之逆旅ニシテ、光陰ハ者、百代之過客ナリ。

(李白・春夜宴桃李園一序)

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。

《そもそも天地はあらゆる物が泊まっていくな宿屋のよつなものであり、月日は永遠の旅人である。》

6 如「ことシ・シク・モシ・ゆク」の1  
7 若「ことシ・シク・モシ・なんぢ」の1  
「如」と「若」は「ことシ・シク・モシ」の三つの読みが共通である。

「ことシ…」のようだ。

人生ハ如シ白駒ノ過ルレ隙ヲ。 (十八史略)

人生は白駒の隙を過ぐるが如し。

《人生の過ぎやすいことはまるで戸の隙間から白い馬が駆けていくのを見るよつなものである。》

シク…ほとんど否定の「不如」「莫如」のかたちで、…に及ばない。…に及ぶものはない。

心ノ不火若カ人ニ、則チ不知レ悪ム。 (孟子)

心の人に若かざるは、則ち悪むことを知らず。

《自分の心が他の人の心に及ばないことについては、それを恥じきらうことを知らない。》

知火臣莫如君。 (史記)

臣を知るは君に如くは莫し。

《臣下のことを知っているのは君主に及ぶものはない。》

6 如 7 若 の 2

もし…ならば。

如<sup>シ</sup>詩不<sup>レ</sup>成<sup>ラ</sup>、罰<sup>ハ</sup>依<sup>ニ</sup>金谷<sup>ノ</sup>酒数<sup>ニ</sup>。 (李白・春夜宴<sup>ニ</sup>桃李園<sup>一</sup>序)

《もしも詩ができなければ罰として金谷での故事にならって酒を飲ませることにしよう。》  
ゆく…行く。

沛公起<sup>テ</sup>如<sup>ク</sup>廁<sup>ニ</sup>。 (史記)

沛公起ちて廁に如く。

《沛公が立ち上がって便所に行った。》

なんぢ…おまえ。君。

若<sup>シ</sup>入<sup>リ</sup>前<sup>ニ</sup>為<sup>セ</sup>レ寿<sup>ヲ</sup>。 (史記)

若入り前みて寿を為せ。

《お前は中に入り前に進み出て健康を祝福せよ。》

8 将 「はタ・ひき丸ル・まさニ」 (ント) す

はタ…そもそも。それとも。いったい。

既<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>レ盗<sup>ヲ</sup>矣、仁将<sup>タ</sup>焉<sup>クニ</sup>在<sup>ラン</sup>。 (列子)

既に盗を為す、仁将た焉くにか在らん。

《もう泥棒をしました。仁はいったいどこにあるだろうか、どこにもない。》

ひき丸ル…ひきこる。

其<sup>ノ</sup>馬将<sup>ニ</sup>胡<sup>ノ</sup>駿馬<sup>ヲ</sup>一而帰<sup>ル</sup>。 (淮南子)

其の馬胡の駿馬を将めて帰る。

《其の馬が胡の駿馬をひきつれて帰ってきた。》

まきニ「 (ント) す…」 (説苑)

将<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>擊<sup>タ</sup>之<sup>ヲ</sup>。 (説苑)

将に自ら之を撃たんとす。

《今にも自分でこれを撃つとする。》

9 且「かつ・しばラク・まさニ」(ント)す

かつ…そのつえ。しかも。

邦<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>道<sup>ニ</sup>、貧<sup>シ</sup>且<sup>チ</sup>賤<sup>シ</sup>焉<sup>キハ</sup>恥<sup>也</sup>。(論語)

邦に道有るに、貧しく且つ賤しきは恥なり。

《国に正しい道義が行われているのに、その中で貧乏でそのつえ身分が低いというのは、(自分の働きがないためで)人として恥ずべきことである。》

しばラク…とりあえず。まあまあ。

天運苟<sup>クモ</sup>如<sup>ク</sup>此<sup>ニ</sup>且<sup>チ</sup>進<sup>ム</sup>杯中<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>。(陶淵明)

天運苟くも此くの如くんば且ち杯中の物を進めん。

《天運がもしもこのようなものだしたら、まあ酒でも飲むことにしようか。》

まオニ「(ント)す…」(そのつえ)。「将」に同じ。

引<sup>レ</sup>酒<sup>ヲ</sup>且<sup>チ</sup>飲<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>。(戦国策)

酒を引き寄せて且に之を飲まんとす。

《酒を引き寄せて今にも飲もうとする。》

10 宜「むべ(うべ)ナリ…よろシ・よろシク〜ベシ」

むべ(うべ)ナリ…もつともなことである。

牡丹<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>愛<sup>ス</sup>ル<sup>ハ</sup>、宜<sup>シ</sup>乎<sup>レ</sup>衆<sup>ノ</sup>矣<sup>。</sup>(周敦頤・愛蓮説)

牡丹を之れ愛するは、宜なるかな衆きこと。

《牡丹は(花の富貴なものであるから)(これを愛する人が多いのはもつともなことだなあ。》

惟<sup>ダ</sup>仁<sup>者</sup>宜<sup>シ</sup>乎<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>高<sup>位</sup>。(孟子)

惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。

《ただ仁德のあるものだけが高位についているのがよいのだ。》

之<sup>ノ</sup>子<sup>子</sup>于<sup>キ</sup>歸<sup>ツ</sup>宜<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>室<sup>家</sup>。(詩経)

之の子子き歸ぐ其の室家に宜しからん。

《この娘は、いまお嫁に行く。嫁ぎ先の家きつとつまくいくだろう。》

11 而「置き字・しかうシテ（しかシテ）・しかモ・しかルニ・しかレドモ・なんぢ」

「なんぢ」以外の読みは接続の用法。順接、逆接両方ある。置き字の順接の用法と、逆接の用法を一つずつあげておく。

読書百遍 而義自見（魏志）

読書百遍にして義自見（魏志）

《何回も繰り返し返して読めば意味の分らないところもおのずからわかるのである。》

陛下不能將兵 而善將將（史記）

陛下は兵に將たる能はず、而れども善く將に將たり。

《陛下は兵士の大将となることはおできになりませんが、立派に大将の大将とられます。》

なんぢ…君。お前。そなた。

必欲烹烹而翁一、則幸二分 我一杯羹（史記）

必ず而の翁を烹んと欲せば、則ち幸ひに我に一杯の羹を分けて。

《どうしてもそなたの父を煮るといふのなら、どうか私にそのスープを一杯分けてほしいものだ。》

12 爾「しかり…そつである。その通り」

しかり…そつである。その通り。

問君何能爾 心遠地自偏（陶淵明・飲酒）

君に問ふ何ぞ能く爾ると心遠ければ地自ら偏なり。

《ある人が私に尋ねる、「どうしてそついう生活ができるのか。」と。私は答える。「心が俗界から遠くはなれているので、住む土地も自然と辺鄙になるのだ。」と。》

なんぢ…君。お前。そなた。

爾為爾、我為我（孟子）

爾は爾為り、我は我為り。

《お前はお前である、私は私である。》

のみ…だけ（だ）。

非死則徙爾（柳宗元・捕蛇者説）

死せるに非ざれば則ち徙りしのみ。

《死んだのでなければ他の土地へ移っただけである。》

13 是「ココニ・ココノ・コレ・ゼナリ」

ココニ・ココノ・コレ…ココノ・コレ、これ、それ。

是<sub>レ</sub>魯<sub>ノ</sub>孔丘<sub>ト</sub>与<sub>。</sub> (論語)

是れ魯の孔丘か。

《それは魯の孔丘のことか。》

ゼナリ…正し。

覺<sub>ニ</sub>今<sub>ノ</sub>是<sub>ニ</sub>而<sub>シテ</sub>昨<sub>ノ</sub>非<sub>ナルヲ</sub>。 (陶淵明・歸去來兮辭)

今の是にして昨の非なるを覺る。

《今が正しく昨日までが間違っていたことに気づいた。》

14 斯「ココニ・ココノ・コレ・すなはチ」

ココニ…ココノ。場所や状況を表す場合と、「すなはチ」と同じく接続を表す場合とがある。

天下之善士<sub>ハ</sub>、斯<sub>ニ</sub>友<sub>ニ</sub>トス<sub>ト</sub>天下之善士<sub>ヲ</sub>。 (孟子)

天下の善士は、斯に天下の善士を友とす。

《天下の行いの正しい人は、それは天下の行いの正しい人を友とする。》

ココノ・コレ…この、これ。「此」に同じ。

斯<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>シテ<sub>リ</sub>而<sub>有</sub>リ<sub>ニ</sub>斯<sub>ノ</sub>疾<sub>一</sub>。 (論語)

斯の人に於て斯の疾有り。

《こういつ(立派な)人でありながら、このような病にかかるとは。》

すなはチ…「則」にほぼ同じ。

我欲<sub>セバ</sub>レ<sub>ニ</sub>仁<sub>ヲ</sub>、斯<sub>チ</sub>仁<sub>ニ</sub>至<sub>ル</sub>矣<sub>。</sub> (論語)

我仁を欲せば、斯ち仁に至る。

《私が仁を欲すると、仁はやってくるのである。》

者「こと・は・もの」

「こと・こと」事柄。

范増数目<sup>シ</sup>二項王<sup>ニ</sup>一、拳<sup>ニ</sup>所<sup>ノ</sup>佩<sup>ブル</sup>玉玦<sup>ヲ</sup>一以<sup>テ</sup>示<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>者<sup>三</sup>タビス。(史記)

范増数項王に目し、佩ぶる所の玉玦を挙げて、以て之に示すこと三たびす。

《范増はしばしば項王に目くばせし、腰に帯びていた玉玦を差し上げて項王に示すことが三度であった。》

は…は。…とは。

教化者、国家之急務也。(資治通鑑)

教化は、国家の急務なり。

《教化ということは、国家の第一にすべき務めである。》

もの…は。者。物。人。こと。とき。わけ。

子曰ク、「由、知<sup>ル</sup>德<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>鮮<sup>ナ</sup>矣。」(論語)

子曰く、「由、徳を知る者は鮮なし。」と。

《孔子がおっしゃった、「子路よ(由のこと) 道徳を認識するものは少ないね。」と。》

焉「いづくニカ・いづくンゾ・えん・これ」

いづくニカ…どこに。場所を問う。

天下之父<sup>ノ</sup>歸<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>、其<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>焉<sup>ニ</sup>往<sup>カ</sup>ン。(孟子)

天下の父之に帰せば、其の子焉くにか往かん。

《天下の父がこれ(文王)に帰服した以上、その子(人民)はどこに往けようか、往けはしない。》

いづくンゾ…どうして。理由を問う。

割<sup>レ</sup>雞<sup>ヲ</sup>焉<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>牛<sup>ノ</sup>刀<sup>ヲ</sup>一。(論語)

雞を割くに焉くんぞ牛刀を用ひん。

《雞を割くのにどうして牛刀を用いる必要があるだろうか、そんな必要はないのだ。》

(えん)…文末の断定の字。ただしその場合は置き字で、「えん」と読むことはない。

宅辺<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>五<sup>ノ</sup>柳<sup>ノ</sup>樹<sup>一</sup>、因<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>号<sup>ト</sup>焉<sup>。</sup>(陶淵明・五柳先生伝)

宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す。

《家の周囲に五本の柳の木がある。それにちなんで号とした。》

これ…これ。「於此」に等しい。

反<sup>レ</sup>身<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>誠<sup>ナ</sup>樂<sup>シ</sup>莫<sup>シ</sup>大<sup>レ</sup>焉<sup>。</sup>(孟子)

身に反りみて誠なれば、楽しみ焉より大なるは莫し。

《わが身を省みてやましいところがなければ、これより大きい楽しみはない。》

17 悪「いづくニカ・いづくンゾ・にくム」

いづくニカ…どこに。場所を問う。

居悪<sup>クニカ</sup> 在<sup>ル</sup>、仁是<sup>レ</sup>也。路悪<sup>クニカ</sup> 在<sup>ル</sup>、義是<sup>レ</sup>也。(孟子)

居悪<sup>クニカ</sup>にか在<sup>ル</sup>、仁是<sup>レ</sup>なり。路悪<sup>クニカ</sup>にか在<sup>ル</sup>、義是<sup>レ</sup>なり。

《人が落ち着いていられるところはどこにあるかと言えは、それは仁がこれである。人が従うべき道はどこにあるかと言えは、それは義がこれである。》

いづくンゾ…どうして。理由を問う。

彼悪<sup>クニカ</sup> 知<sup>ラ</sup>之<sup>ヲ</sup>。(孟子)

彼悪<sup>クニカ</sup>くんぞ之を知らん。

《彼ら（人民）はどうしてこのことを知りましょうか、知りはないのだ。》

にくム…憎む。嫌う。音読みは「ム」

非<sup>ザル</sup>不<sup>ルニ</sup> 悪<sup>マ</sup> 寒<sup>キヤ</sup>也。(韓非子)

寒きを悪<sup>マ</sup>まざるに非<sup>ザル</sup>ざるなり。

《寒さを憎まないのではない。》

18 以「もつテ・もつテス・ゆゑ」

もつテ…を。…で。…に。…によって。手段・方法・対象・理由等を表す。そして接続を表す。

以<sup>テ</sup>子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>矛<sup>ヲ</sup>、陷<sup>ス</sup>子<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>楯<sup>ヲ</sup>何如。(韓非子)

子の矛を以て、子の楯を陥<sup>ス</sup>さば何如。

《あなたの矛でもってあなたの楯を突いたらどうですか。》

もつテス…によってする。…でする。…を以て…する」を逆にして「…するに…を以てす」となる。

況<sup>シヤ</sup>陽春召<sup>レ</sup>クニ我<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>煙景<sup>ヲ</sup>、大塊<sup>反</sup>レ我<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>文章<sup>ヲ</sup>。

(李白・春夜宴桃李園一序)

況<sup>シヤ</sup>んや陽春我を召<sup>クニ</sup>くに煙景<sup>ヲ</sup>を以てし、大塊<sup>反</sup>我に仮<sup>カ</sup>ずに文章<sup>ヲ</sup>を以てするをや。

《ましてうららかな春が霞たなびく景色で我々をまねき、造花の神が我々に文学の才能を貸し与えている場合はなおさらだ。》

ゆゑ…わけ。理由

古人<sup>秉</sup>燭<sup>ヲ</sup>夜遊<sup>フ</sup>、良<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>也。(李白・春夜宴桃李園一序)

古人<sup>秉</sup>燭<sup>ヲ</sup>を乗りて夜遊<sup>フ</sup>ぶ、良<sup>ニ</sup>に以<sup>テ</sup>有<sup>ル</sup>るなり。

《昔の人は灯火を手にとって夜まで遊んだというが、まことにもつともなことだ。》

惟「おもフ・コレ・ただ」

おもフ… 思う。考える。

願ハクハ大王詳ラカニ惟ヘ之ヲ。(漢書)

願はくは大王詳らかに之を惟へ。

《どうか大王様このことをよくお考え下さい。》

コレ…これ。文頭、文中において口調を整える。

惟レ十有二年春、大ニ会ス於ニ孟津ニ。(書経)

惟れ十有二年春、大いに孟津に会す。

《十三年の春に、孟津で大いに会合した。》

ただ…ただ…だけ。

無ニ恒産ニ而有ル恒心一者ハ、惟タ士ノ為ス能クスルコトヲ。(孟子)

恒産無くして恒心有る者は、惟だ士のみ能くすることを為す。

《一定不変の財産がなくて常に変わらぬ道義心を持ち続けることができるのは、ただ学問修養のできた士だけがこれをなすことができるのである。》

自「おのづから・みづから・より」

おのづから…自然と。ひとりで。

心遠ケレバ地自ラ偏ナリ。(陶淵明・飲酒)

心遠ければ地自ら偏なり。

《心が俗界から遠く離れているので、住む土地も自然と辺鄙になるのだ。》

みづから…自分から。自分を。

天生ノ麗質難ク自ラ棄テ一朝選ハレテ在リ君王ノ側ニ。(白居易・長恨歌)

天生の麗質は自ら棄て難く一朝選はれて君王の側に在り。

《生まれつきの美しさは自分で捨て去ろうとしてもできるものではなくたちまち選ばれて王様の側に侍ることになった。》

より……から。…より。

禍ヒ自レ口出テ病ハ自レ口入ル。(言志録)

禍ひは口より出で、病は口より入る。

《災難というものは口から出て、病気というものは口から入るものである。》

21

即「すなはち・つく・もし」

すなはち…すぐに。とりもなおさず。

樊噲即ち帯レ劍ヲ擁レ盾ヲ入ルニ軍門ニ。(史記)

樊噲即ち劍を帯び盾を擁して軍門に入る。

《樊噲はすぐに劍を身につけ、盾を抱えて軍門に入って行った。》

つく…(地位・位置)につく。接する。近づく。

不レ即カ不レ離レ。(仏・円覚經)

即かず離れず。

《くつつきもしないし離れもしない。》

もし…もしも。

王即シ不レ聽カレ用レフルヲ、必ス殺セレ之ヲ。無レカレ令レムルヲ出レ境ヲ。(史記)

王即し鞅を用ふるを聴かずんば、必ず之を殺せ。境を出でしむる無かれ。

《王様がもしも鞅を用いることを聞き入れにならないのならば、必ず彼を殺しなさい。国境を出て他国へ行かせてはいけません。》

22

故「ことさらニ・ふるシ・ゆゑニ」

ことさらニ…わざと。わざわざ。

故ラニ遣レ將守レ関者ハ、備ニ他盗ノ出入ト与ニ非常一也。(史記)

故らに將を遣はし関を守らしめし者は、他盗の出入と非常とに備へしなり。

《わざわざ武將をつかわして関所を守らせた訳は、他の盜賊の出入りと非常事態とに備えたのです。》

ふるシ…年を経たもの。以前にあったこと。馴染みのもの。

子曰ク、「温ニ故ニ而知レ新シキヲ、可ニシト以テ為レ師ト矣。」(論語)

子曰く、「故きを温ねて新しきを知る、以て師と為るべし。」と。

《先生がおっしゃった、「古いことに習熟して、新しいことも知れば、人の教師となれるである。』》

ゆゑニ…だから。そういうわけで。

子曰ク、「求也退ク、故ニ進ムレ之ヲ、由也兼レ人ヲ、故ニ退クト之ヲ。」(論語)

子曰く、「求や退く、故に之を進む、由や人を兼ね、故に之を退く。」と。

《孔子がおっしゃった、「求は消極的だからはげましたが、由はでしゃばりだからそれをおさえたのだ。』と。》

謂「いフ・おもへラク」

いフ…言う。言うことには。

顧謂「正季」曰、「死而何為。」（日本外史）

顧みて正季に謂ひて曰く、「死して何をか為さん。」と。

《振り返って正季の方を見て言うには、「死んでからどうしようか。」と。》

おもへラク…思うには」と。と思う。」「以為」も「おもへラク」と読む。（

臣謂、小人無朋、惟君子則有之。其故何哉。（朋党論）

臣謂へらく、小人には朋無し、惟だ君子には則ち之れ有りと。其の故は何ぞや。

《私が思いますには、「つまらぬ人間には仲間とか党派とかいうものはありません。ただ

立派な君子にだけこれがあります。」と。このわけは、いったいどういふことでしょうか。》

以為「畏」狐也。（戦国策）

以為へらく「狐を畏るるなり」と。

《狐を恐れていると思ったのである。》

已「すで」のみ」

すで…もはや、すでに。

嚮吾不為「斯」役、則「久」已「病」矣。（柳宗元・捕蛇者説）

嚮に吾斯の役を為さずんば則ち久しく已に病みしならん。

《もしも私が以前からこの（蛇取りの）仕事をしていなかったらおそろくとうの昔から

疲れはててしまっていたことでしょう。》

のみ…だけ（だ。）

苟「無」恒心、放辟邪侈、無「不」為「已」。（孟子）

苟くも恒心無ければ、放辟邪侈、為さざる無きのみ。

《人がもしも一定不変の道德心がないならば、わがまま勝手にし放題をして、平気なのだ。》

25 事「ことトス・つかフ」

ことトス…つとめる。専念する。

回雖<sup>モ</sup>不<sup>ニ</sup>敏<sup>ナリト</sup>、請<sup>フ</sup>事<sup>ト</sup>斯<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>矣。(論語)

回不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。

《回は至らぬ者ですが、この言葉を実行するよう専念したいと思います。》

つかフ…仕える。

未<sup>ダ</sup>能<sup>ハ</sup>事<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>焉<sup>ク</sup>、能<sup>ク</sup>事<sup>レ</sup>鬼<sup>ニ</sup>。(論語)

未だ人に事ふる能はず、焉くんぞ能く鬼に事へん。

《まだ人に仕えることもできないのに、どうして死者の霊に仕えることができようか。》

26 卒「つひニ・にはカニ」

つひニ…とつとつ、結局。

然<sup>レ</sup>モ今<sup>ニ</sup>卒<sup>ニ</sup>困<sup>ニ</sup>於<sup>此</sup>。(史記)

然れども今卒に此に困しむ。

《しかしながら今、結局ここで苦しんでいる。》

にはカニ…あわてて。いそいで。突然。

卒<sup>カニ</sup>揺<sup>ニ</sup>易<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>、則<sup>チ</sup>民<sup>心</sup>惑<sup>フ</sup>。(漢書)

卒かに之を揺易すれば、則ち民心惑ふ。

《急にこれをつつしかえると、民の心は惑つのである。》

27

直「たダ・なほシ」

たダ…ただくである。

直ダ不ル百歩ナラ一耳。(孟子)

直ダだ百歩ならざるのみ。

《ただ(逃げたのが)百歩になっていないというだけだ。》

まっすぐ。ただしい。正直。

父ハ為レ子ノ隱シ。子ハ為レ父ノ隱ス。直キ在リ其ノ中ニ一矣。(論語)

父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直なほきこと其うちの中うちに在り。

《父は子のために罪をかばって隠してやり、子は父のためにその悪いところを隠してかばう。正直というのはこのような父と子がかばい合つところにある。》

28

徒「いたづラニ・たダ」

いたづラニ…むだに。

州郡之職ハ、徒ラ勞スル人ヲ耳。(蒙求)

州郡の職は、徒いたづらに人を勞らするのみ。

《州や郡を治める仕事は、ただむだに自分の身を勞らするばかりである。》

たダ…ただくだけだ。

非ス徒ニ無キ益ヲ而シテ亦ハ害ス之ヲ。(孟子)

徒ただに益た無なきのみならず而しかうして亦また之を害す。

《ただ無益なだけでなく、その上有害でもある。》

## 29 毎「じつとニ・つねニ」

「じつとニ…じつとに。そのたびに。

毎ニ戦フ必ズ敗ル。(孫子)

戦ふ毎に必ず敗る。

《戦つじつとに必ず敗れる。》

つねニ…じつとも。じつとに。

先帝在時、毎ニ与レ臣論ス此ノ事。 (諸葛亮・出師表)

先帝在りし時、毎に臣と此の事を論ず。

《先帝が御存命中は、いつも私とこのことを議論していました。》

## 30 可「かなり・ベシ」

かなり…できる。じつとしてよい。まあよい。

朝ニ聞レカバ道ヲ、夕ニ死ストモ可ナリ矣。(論語)

朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。

《もしも朝に人の踏み行うべき道を聞き、そしてそれを自分のものにできたなら、その夕方には死んでもかまわない。》

ベシ…じつとできる。じつとしてよい。じつとするがよい。

子曰ク「三軍モ帥ヲ奪フレ帥也。匹夫モ不レ可レ奪フレ志也。」(論語)

子曰く「三軍も帥を奪ふべきなり。匹夫も志を奪ふべからざるなり。」と。

《先生が言われた、「三軍の大將でも生け捕りにすることができる。しかしたとえ卑賤な男であっても、その意志を奪い取ることはできない。」と。》

三名詞 (1) 和漢異義語 の 1

31 鬼「き」

死者。死者の魂。幽霊。妖怪。神。桃太郎に出てくる「おに」ではない。

鬼復<sup>タ</sup>言<sup>フ</sup>、「何<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>有<sup>レ</sup>ル<sup>カ</sup>ト<sup>ト</sup>声<sup>。</sup>」定伯曰<sup>ク</sup>、「新<sup>タ</sup>ニ死<sup>シ</sup>、不<sup>ル</sup>レ<sup>レ</sup>習<sup>ハ</sup>レ<sup>レ</sup>渡<sup>ル</sup>ニ<sup>レ</sup>水<sup>ヲ</sup>耳<sup>。</sup>」

勿<sup>カ</sup>レ<sup>ト</sup>怪<sup>シ</sup>ム<sup>シ</sup>ム<sup>シ</sup>吾<sup>ヲ</sup>也<sup>。</sup>」(搜神記)

鬼復<sup>タ</sup>言<sup>フ</sup>、「何<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>声<sup>有</sup>るか。」と。定伯曰<sup>ク</sup>、「新<sup>タ</sup>に死<sup>シ</sup>、水<sup>ヲ</sup>を渡<sup>ル</sup>るに習<sup>ハ</sup>はざるのみ。吾<sup>ヲ</sup>を怪<sup>シ</sup>む勿<sup>カ</sup>かれ。」と。

《妖怪が再び言った、「なぜ音がするのだ。」と。定伯が言った、「死んだばかりで、川を渡るのに慣れていないのだ。私を怪しむな。」と。》

32 故人「こじん」

友人。旧友。日本語の「死んだ人」とは異なる。

勸<sup>ム</sup>君<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>尽<sup>ク</sup>セ<sup>一</sup>杯<sup>ノ</sup>酒<sup>。</sup> 西<sup>ノ</sup>カ<sup>タ</sup>出<sup>テ</sup>陽<sup>関</sup>一<sup>無</sup> 故人<sup>一</sup>

(王維・送三元二使安西)

君<sup>ニ</sup>勸<sup>ム</sup>更<sup>ニ</sup>尽<sup>ク</sup>せ<sup>一</sup>杯<sup>ノ</sup>の酒<sup>。</sup> 西<sup>ノ</sup>かた陽関<sup>ヲ</sup>を出<sup>テ</sup>なば故人<sup>無</sup>からん

《さあ君、もう一杯酒を飲み干しなさい。西に行つて陽関を出てしまえば、古い友人もいないだろうから。》

三名詞 (1) 和漢異義語 の 2

33 大丈夫「だいじょうぶ」

意志が強く立派な人物。一人前の立派な男子。日本語では、「だいじょうぶ」と読み、「確實・まちがいのないこと」を表す。「大」をとった「丈夫」も漢文では「一人前の男子」という意味だが、日本語では「強いこと・健康」という意味になる。

富貴<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>淫<sup>スル</sup>。 貧賤<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>移<sup>ス</sup>。 威武<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>屈<sup>スル</sup>。 此<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>ニ<sup>一</sup>大<sup>丈</sup>夫<sup>。</sup>

夫<sup>ト</sup>。(孟子)

富貴<sup>モ</sup>淫<sup>ス</sup>る能<sup>ハ</sup>はず。貧賤<sup>モ</sup>移<sup>ス</sup>る能<sup>ハ</sup>はず。威武<sup>モ</sup>屈<sup>ス</sup>る能<sup>ハ</sup>はず。此<sup>ヲ</sup>を之<sup>レ</sup>大<sup>丈</sup>夫<sup>ト</sup>と謂<sup>フ</sup>。《富貴な地位でもその心を誘惑することはできない。貧賤の苦しみも節操を変えさせることはできない。権力や武力によるおどしでも志をまげさせることはできない。このよう

34 百姓「ひやくせい」

人民。民衆。日本語の農民を表す「ひやくしょう」ではない。まさしく百の「姓」のこと。中国人の姓は一字が多いので、日本に比べると「姓」の種類が非常に少ない。

百姓<sup>不</sup>足<sup>レ</sup> 君<sup>執</sup>与<sup>ニ</sup>足<sup>ラン</sup>。(論語)

百姓<sup>不</sup>足<sup>ラ</sup>ば君<sup>執</sup>と与<sup>ニ</sup>に<sup>カ</sup>足<sup>ラ</sup>ん。

《人民が十分でないのに、殿様は誰と一緒に十分であるというのでしょうか。》

三名詞 (2) 人称 (一) の 1

35 「己」[「おのれ」]

自分、自己。

己<sup>己</sup>所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>欲<sup>セ</sup>、勿<sup>レ</sup>施<sup>ス</sup>人<sup>ニ</sup>。(論語)  
己<sup>己</sup>の欲<sup>欲</sup>せざる所<sup>所</sup>は、人<sup>人</sup>に施<sup>施</sup>すこと勿<sup>勿</sup>かれ。

《自分の望まないことは、他人にもしてはいけない。》

36 寡人「かじん」

諸侯の自称。徳の少ない人の意。「孤」も同様に用いられる。自分・私。

諸侯見<sup>見</sup>天子<sup>ニ</sup>曰<sup>ヒ</sup>臣某侯某<sup>ト</sup>、其<sup>其</sup>与<sup>レ</sup>民言<sup>フ</sup>、自<sup>自</sup>称<sup>テ</sup>曰<sup>フ</sup>寡人<sup>ト</sup>。(礼記)  
諸侯天子に見<sup>見</sup>ゆるに臣某侯某と曰<sup>曰</sup>ひ、其<sup>其</sup>の民と言<sup>言</sup>ふや、自<sup>自</sup>称<sup>テ</sup>して寡人<sup>ト</sup>と曰<sup>曰</sup>ふ。

《諸侯が天子にお目にかかると自分のことを「臣なにかし」と言い、人民に對しては、寡人と言<sup>言</sup>つ。》

37 孤「こ」

王侯の自称。字の本来の意味は孤児。自分・私。

侯王<sup>ハ</sup>自<sup>自</sup>謂<sup>フ</sup>孤寡不穀<sup>ト</sup>。(莊子)

侯王は自<sup>自</sup>ら孤寡不穀<sup>不穀</sup>と謂<sup>謂</sup>ふ。

《侯王は自分のことを孤(みなしこ)寡(やもめ)不穀(しもべ)と呼んでへりくだるのだ。》

三名詞 (2) 人称 (一) の 2

38 妾「しよつ」

婦人のへりくだった自称。

妾<sup>妾</sup>顔未<sup>未</sup>改<sup>マ</sup>君<sup>君</sup>心改<sup>マ</sup>。(白居易・太行路)

妾<sup>妾</sup>が顔未<sup>未</sup>だ改<sup>改</sup>まらざるに君<sup>君</sup>が心改<sup>改</sup>まる。

《私の容色はまだ衰えてはいないのに、君は心変わりをしてしまった。》

39 朕「ちん」

自分。私。古代の一人称代名詞。秦の始皇帝が天子の自称とすることに定めてから、天子専用の一人称となった。日本でこの一人称を用いることが出来るのは天皇だけである。

万方<sup>万</sup>有<sup>有</sup>罪<sup>レ</sup>、罪<sup>罪</sup>在<sup>在</sup>朕<sup>ガ</sup>躬<sup>ニ</sup>。(論語)

万方<sup>万</sup>に罪有<sup>有</sup>らば、罪<sup>罪</sup>は朕<sup>朕</sup>が躬<sup>躬</sup>に在<sup>在</sup>り。

《あちこちの人民たちが罪を犯しましたならば、その罪は私の身に帰します。》

40 予・余「よ」

自分・私。

百姓有<sup>有</sup>過<sup>チ</sup>、在<sup>在</sup>予<sup>ニ</sup>一人<sup>ニ</sup>。(論語)

百姓<sup>百</sup>過<sup>過</sup>ち有<sup>有</sup>らば、予<sup>予</sup>一人<sup>一</sup>に在<sup>在</sup>り。

《民に過ちがあれば(その責任は)私一人にある。》

三名詞 (3) 人称 (二) の 1

41 子「し」

男子の敬称。先生の意。呼び掛けとして使うときは、「あなた」という丁寧な言い方になる。  
或<sup>ある</sup>謂<sup>ヒト</sup>孔子<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「子奚<sup>ソ</sup>不<sup>レ</sup>為<sup>サ</sup>政<sup>ヲ</sup>。」(論語)

《ある人が孔子に向かって言うには、「子奚ぞ政を為さざる。」と。  
つ込んでいられるのですか。》と。》

42 小子「しょうこ」

おまえたち。弟子に対する呼び掛け。

夫子曰<sup>ク</sup>、「小子識<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>。」苛政<sup>ハ</sup>猛<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>虎<sup>ヨリ</sup>也<sup>ト</sup>。」(礼記)

夫子曰<sup>ク</sup>、「小子之<sup>ヲ</sup>を識<sup>セ</sup>。」苛政<sup>ハ</sup>虎<sup>ヨリ</sup>も猛<sup>ナリ</sup>。」と。

《先生(孔子)が言われた、「おまえたち、よく覚えておきなさい。むごい政治というものは、虎よりも恐ろしいものだ。》と。》

43 足下「そっか」

あしもと。人に対する敬称。貴下。

再拜<sup>シ</sup>献<sup>ズ</sup>大王<sup>ノ</sup>足下<sup>ニ</sup>。」(史記)

再拜<sup>シ</sup>大王<sup>ノ</sup>の足下<sup>ニ</sup>に献<sup>ズ</sup>。

《再拜して大王様に献上いたします。》

三名詞 (3) 人称 (二) の 2

44 女・若・爾・汝・乃・而「なんぢ」

おまえ。君。

子謂<sup>ヒテ</sup>子貢<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「女<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>回<sup>也</sup>孰<sup>レ</sup>愈<sup>レルト</sup>。」(論語)

子、子貢に謂ひて曰<sup>ク</sup>、「女<sup>ト</sup>と回<sup>ト</sup>と孰<sup>レ</sup>れか愈<sup>ル</sup>。」と。

《孔子が子貢に向かって言われた、「おまえと回とはどっちが優れているか。》と。》

45 二三子「にさんし」

諸君。おまえたち。弟子によびかける語。

子曰<sup>ク</sup>、「二三子、偃<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>言<sup>ニ</sup>是<sup>也</sup>也。前言<sup>ハ</sup>戲<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>耳。」(論語)

子曰<sup>ク</sup>、「二三子、偃<sup>ニ</sup>の言<sup>ニ</sup>は是<sup>ナリ</sup>なり。前言<sup>ハ</sup>は之<sup>ニ</sup>に戯<sup>レ</sup>れしのみ。」

《諸君、偃の言葉は正しい。さっき言ったのはからかっただけ。》

46 陛下「へいか」

天子の敬称。

陛下<sup>ハ</sup>所謂<sup>ニ</sup>天授<sup>ニシテ</sup>、非<sup>ニ</sup>人力<sup>ニ</sup>也。」(十八史略)

陛下<sup>ハ</sup>は所謂<sup>ニ</sup>天授<sup>ニシテ</sup>にして、人力<sup>ニ</sup>に非<sup>ズ</sup>ざるなり。

《陛下(の能力)は世に言われているところの天からの授かりものであって、人間わざではないのである。》

三 名詞 (4) 呼称 の 1

47 字「あざな」

中国人は姓名の他に、二十歳になったとき、呼び名として字というものをつける。名は本人が用い、他人を呼ぶときには字を用いるのが普通である。有名な詩人の例を挙げると、杜甫、字は子美、したがって杜子美という言い方もできる。

孔子名ハ丘、字ハ仲尼。父曰、「二叔梁紇ト。」(十八史略)

孔子名は丘、字は仲尼。父を叔梁紇と曰ふ。

《孔子は名は丘、字は仲尼といった。父は叔梁紇という名である。》

48 諱「いみな」

死者の生前の本名。死んでからは諡(おくりな)で呼ぶべきで、名は忌むので、「忌み名」の意である。

入レ門ニ而問フレ諱ヲ。(礼記)

門に入りて諱を問ふ。

《門に入って、諱をたずねる。》

三 名詞 (4) 呼称 の 2

49 諡「おくりな」

死者の生前の業績を称えてつける名のこと。また、おくりなをつけること。

諡レ援ニ曰フ「忠成侯ト。」(後漢書)

援に諡して忠成侯と曰ふ。

《援に忠成侯というおくりなをつけた。》

50 号「いじゆ」

雅号。ペンネーム。有名な人物を例に挙げると、李白、字(あざな)は太白、号は青蓮居士(せいれんこじ)。

宅辺ニ有五柳樹、因レ以テ為スレ号ト焉。(陶淵明・五柳先生伝)

宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す。

《家の周囲に五本の柳の木がある。それにちなんでペンネームとした。》

三名詞 (5) 人物 の 1

51 夷狄「いてき」

中国周辺の異民族をさげすんで呼ぶ総称。夷・蛮・戎・狄（東夷・南蛮・西戎・北狄）の略称。

夷狄之有<sup>ル</sup>君、不<sup>ル</sup>如<sup>カ</sup>諸夏之亡<sup>キ</sup>也。（論語）

夷狄の君有るは、諸夏の亡きに如かざるなり。

《夷狄に君主があっても、中国の君主がないのにも及ばない。》

52 燕雀「えんじゃく」

つばめと、すずめ。小人物のたとえ。

燕雀不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>天地之高<sup>キ</sup>也。（塩鉄論）

燕雀は天地の高きを知らず。

《燕や雀のようなものは、天地の広大であることを知らない。》

53 客「かく」

まろつど。たびびと。いそつろつ。

客<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>下<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>鷄<sup>鳴</sup>者<sup>上</sup>。（史記）

客に能く鷄鳴を為す者有り。

《食客のなかに鷄の鳴き真似のできるものがいた。》

三名詞 (5) 人物 の 2

54 兄弟「けいてい」

きょうだい。また、広く他人を親しんで呼ぶ。我国での普通の読みは「きょうだい」だが、これは呉音で、漢文では漢音で読むことになっているため、「けいてい」と読む。

胡<sup>ハ</sup>兄弟之国也。子言<sup>フ</sup>伐<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>何<sup>ソ</sup>也。（韓非子）

胡は兄弟の国なり。子之を伐てと言ふは何ぞや。

《胡は親しみ深い（君主間に姻戚関係のある）国である。あなたがその国を攻撃せよといふのはいったいどういふ訳だ。》

55 鴻鵠「こうこく」

おおとり。大人物や英雄のたとえ。

燕雀安<sup>ク</sup>知<sup>ラ</sup>鴻鵠之志<sup>ヲ</sup>哉。（十八史略）

燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや。

《燕や雀のような小人物は、どうして鴻鵠（大きな鳥）のような大人物の志を知ることができようか、知ることはできない。》

三名詞 (5) 人物 の 3

56 胡虜「こりよ」

西北のえびす。匈奴をさす。「虜」は敵をのしる言葉。

何<sup>レ</sup>日<sup>カ</sup>平<sup>ニ</sup>胡虜<sup>ヲ</sup> 良人<sup>罷</sup> 遠征<sup>ヲ</sup> (李白・子夜呉歌)

何れの日か胡虜を平けて 良人遠征を罷めん。

《いったいいつになつたら、えびすどもを平定して夫は遠征から帰って来るのであろうか。》

57 孺子「じゅし」

幼児。こども。年若い者や未熟の者を卑しんでいう言葉。

父去<sup>ル</sup> 里所<sup>、</sup> 復<sup>タ</sup> 還<sup>リ</sup> 曰<sup>ク</sup>、 孺子<sup>可</sup> 教<sup>フ</sup> 矣。 (史記)

父去ること里所、復た還りて曰く、孺子教ふべし。

《老人は一里ばかり行くと、戻ってきて言った、小僧、教えがいがありそうじゃな。》

58 聖人「せいじん」

知徳の優れた最高の人格者。また、天子の尊称。

聖人<sup>ハ</sup> 吾<sup>不</sup> 得<sup>テ</sup> 而<sup>見</sup> 之<sup>ヲ</sup> 矣。 得<sup>バ</sup> 見<sup>ル</sup> 君子<sup>者</sup> 一<sup>ス</sup> 可<sup>ナ</sup> 矣。 (論語)

聖人は吾得て之を見ず。君子者を見るを得ば、斯れ可なり。

《聖人には私はあうことができないにしても、君子にあうことができればそれでまあよい。》

三名詞 (5) 人物 の 4

59 壮子「そうし」

気力のさかなな男。

壮士<sup>髮</sup> 衝<sup>ク</sup> 冠<sup>ヲ</sup>。 (駱賓王・易水送別詩)

壮士髮冠を衝く。

《壮士の髪が(憤りのため逆立って)冠を突き上げる。》

60 弟子「ていし」

年少者。父兄に対して言う。門弟。でし。漢文は漢音で読むのが通例となっているため、

「ていし」と読む。

弟子<sup>入</sup> 則<sup>孝</sup>、 出<sup>テ</sup> 則<sup>弟</sup>。 (論語)

弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟。

《世の若者たちは、家庭にあっては父母に孝行を尽くし、社会に出ては目上に対し従順で

ありたい。》

61 朋「とも」

ともだち。同じ師につく学友。

有<sup>リ</sup> 朋<sup>自</sup> 二<sup>遠</sup> 方<sup>一</sup> 来<sup>タル</sup>、 不<sup>ニ</sup> 亦<sup>樂</sup> 一<sup>乎</sup>。 (論語)

朋有り遠方より来たる、亦樂しからずや。

《友人がいて遠いところから訪ねてきてくれる、なんと楽しいことではないか。》

三 名詞 (5) 人物 の5

62 夫子「ふうし」

先生。男子の尊称。妻が夫を呼ぶ言葉。

夫子之文章、可<sub>ニ</sub>得<sub>テ</sub>而聞<sub>ク</sub>一也。夫子之言<sub>ハ</sub>三性<sub>ト</sub>与<sub>レ</sub>二天道<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>ク</sub>二得<sub>テ</sub>而聞<sub>ク</sub>一也。(論語)

夫<sub>フ</sub>子<sub>シ</sub>の文<sub>ブ</sub>章<sub>シヤウ</sub>は、得<sub>エ</sub>て聞<sub>ク</sub>くべきなり。夫<sub>フ</sub>子<sub>シ</sub>の性<sub>セイ</sub>と天<sub>テン</sub>道<sub>ドウ</sub>とを言<sub>ハ</sub>ふは、得<sub>エ</sub>て聞<sub>ク</sub>くべからざるなり。

《先生の文章は、聞くことができる。しかし人間性と天の道理についての先生の議論は聞くことができない。》

63 不肖「ふしょう」

愚か者。父祖に似ない者の意。子が親の喪に服しているときの自称。

丹朱不<sub>レ</sub>肖<sub>ニ</sub>、舜之子亦不<sub>レ</sub>肖<sub>ニ</sub>。(孟子)

丹<sub>タン</sub>朱<sub>シュ</sub>は不<sub>レ</sub>肖<sub>ニ</sub>にして、舜<sub>シユン</sub>の子<sub>コ</sub>も亦<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>肖<sub>ニ</sub>なり。

《(堯の子の)丹朱は愚か者であり、舜の子もまた、愚か者であった。》

三 名詞 (6) 君臣役職 の1

64 君「きみ」

君主。主君。二人称として使うことももちろんあるが、君主としての用法のときに、日本語の感覚の二人称で考えているとおかしなことになるから注意する必要がある。

夷狄之有<sub>レ</sub>ル君、不<sub>レ</sub>如<sub>ク</sub>二諸夏之亡<sub>キ</sub>一也。(論語)

夷<sub>イ</sub>狄<sub>テキ</sub>の君<sub>キミ</sub>有<sub>ル</sub>るは、諸<sub>シヨ</sub>夏<sub>カ</sub>の亡<sub>ナ</sub>きに如<sub>シ</sub>かざるなり。

《夷狄に君主があっても、中国の君主がないのにも及ばない。》

65 君子「くんし」

徳の高い立派な人。為政者を言うこともある。

子曰<sub>ク</sub>、「君子欲<sub>ス</sub>下<sub>ニ</sub> 訥<sub>ニ</sub> 於言<sub>ニ</sub> 而敏<sub>中</sub> 於行<sub>上</sub>。」(論語)

子<sub>コ</sub>曰<sub>ク</sub>、「君<sub>キミ</sub>子は言<sub>コト</sub>に訥<sub>トウ</sub>にして行<sub>ユク</sub>ひに敏<sub>ミン</sub>ならんことを欲<sub>ス</sub>す。」と。

《孔子が言われるには、「君子(立派な人)は口は重く行動は機敏なことが望ましい。》

三 名詞 (6) 君臣役職

の 2

66 卿「けい」

本来は、臣下の中で大夫・士の上に位置する者。きみ・くげ。執政の大臣。高位高官者。貴人。二人称代名詞としても用いることがある。

敵体相呼<sub>シテ</sub>為<sub>ス</sub>レ卿<sub>ト</sub>。(韻会)

敵体相呼んで卿と為す。

《同輩が互いに卿と呼びあう。》

67 左右「さゆう」

おそばのもの。側近。君主の「左」や「右」の近くにいとるところから。

孟嘗君憂<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>、問<sub>フ</sub>二左右<sub>ニ</sub>。(史記)

孟嘗君之を憂へて、左右に問ふ。

《孟嘗君はこれを心配して、おそばの家来に質問した。》

三 名詞 (6) 君臣役職

の 3

68 士「し」

もともとは卿・大夫と並んで、天子や諸侯の臣下のうちの最も下に位するもの。下級の役人や、官吏の総称としても用いる。大夫と併せて士大夫という呼び方で読書人・知識階級を指すこともある。また、男子の美称としても用いる。

士<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>三</sub>以<sub>テ</sub>不<sub>ル</sub>二弘毅<sub>ナラ</sub>。(論語)

士は以て弘毅ならざるべからず。

《士たるもの、おおらかで強くなければいけない。》

69 上「じょう」

天子。

上<sub>自</sub>二南郡<sub>一</sub>由<sub>リテ</sub>二武関<sub>ヲ</sub>一歸<sub>ル</sub>。(史記)

上南郡より武関を由りて歸る。

《天子は南郡から武関を経由して帰った。》

70 丞相「じょうしょう」

宰相。総理大臣。天子を助けて政治を行う最高の官。

弘病<sub>ミ</sub>、竟<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>丞<sub>相</sub>ヲ一終<sub>ハル</sub>。(史記)

弘病み、竟に丞相を以て終はる。

《弘は病気になり、結局丞相の身分で一生を終わった。》

三名詞 (6) 君臣役職 の 4

71 小人「しょうじん」

つまらない人間。とるにたりない人間。君子の対。

子夏曰ク、「小人之過<sup>ツ</sup>也、必<sup>ス</sup>文<sup>ル</sup>也。」(論語)

子夏曰く、「小人の過<sup>ツ</sup>つや、必<sup>ズ</sup>文<sup>ル</sup>る。」

《つまらない人間は、あやまちをすると、必<sup>ズ</sup>言<sup>ハ</sup>い訳をする。》

72 臣「しん」

臣下、家来。また、私。一人称、謙遜して言う。

臣<sup>少</sup>キヨリ好<sup>メ</sup>リ相<sup>ス</sup>ルヲ人<sup>ヲ</sup>ヨ。 (史記)

臣<sup>少</sup>きより人を相<sup>ス</sup>するを好<sup>ム</sup>めり。

《わたくしは若いときから人の人相を見るのが好きでした。》

73 大夫「たいふ」

卿・大夫・士と三者並べて天子や諸侯の臣下を言う。広く官職のあるものに対する尊称としても用いる。士大夫という呼び方で、読書人・知識階級を指すことも多い。

居<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>邦<sup>ニ</sup>也、事<sup>ヘ</sup>其<sup>ノ</sup>大夫<sup>之</sup>賢<sup>ナル</sup>者<sup>ニ</sup>、友<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>士<sup>之</sup>仁<sup>ナル</sup>者<sup>ニ</sup>也。 (論語)

是<sup>ノ</sup>邦<sup>ニ</sup>に居<sup>ル</sup>るや、其<sup>ノ</sup>大夫<sup>ノ</sup>賢<sup>ナル</sup>者<sup>ニ</sup>に事<sup>フ</sup>へ、其<sup>ノ</sup>士<sup>ノ</sup>仁<sup>ナル</sup>者<sup>ニ</sup>を友<sup>ト</sup>せよ。

《ある国にいるとして、その重臣のなかの優れた人に仕え、(若い)士の中では仁の徳のあるものを友達にしなさい。》

三名詞 (6) 君臣役職 の 5

74 天子「てんし」

天下全体の君主。天帝の子の意。中国の皇帝をこう呼ぶ。「天使 (angel)」ではない。

天子<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>戯<sup>言</sup>。 (柳宗元・桐葉封<sup>レ</sup>弟辯)

天子は戯<sup>言</sup>無し。

《天子は戯れの冗談を言つてはならない。》

75 天帝「てんてい」

宇宙を支配する神。造物主。

天帝<sup>使</sup>三<sup>我</sup>長<sup>ニ</sup>百<sup>獣</sup>。 (戦国策)

天帝我をして百獣に長<sup>タ</sup>らしむ。

《天帝が私を百獣の王にならせている。》

76 布衣「ふい」

官位のない人。平民、庶民。

臣<sup>ハ</sup>本<sup>布</sup>衣<sup>ニ</sup>シテ、躬<sup>ヲ</sup>耕<sup>ス</sup>ニ<sup>於</sup>南<sup>陽</sup>。 (諸葛亮・出師表)

臣は本<sup>布</sup>衣<sup>ニ</sup>にして、躬<sup>ヲ</sup>南<sup>陽</sup>に耕<sup>ス</sup>す。

《私はもともと無位無官で、南陽の地で自分で畑を耕していました。》

三 名詞 (7) 一般 の 1

77 朝「あした」

あき。翌日ではない。

朝<sup>ニ</sup>聞<sup>レ</sup>カバ道<sup>ヲ</sup>、夕<sup>ニ</sup>死<sup>ストモ</sup>可<sup>ナリ</sup>矣。(論語)

朝<sup>あした</sup>に道を聞かば、夕<sup>ゆふべ</sup>に死すとも可なり。

《もしも朝に人の踏み行うべき道を聞き、そしてそれを自分のものにできたなら、その夕方には死んでもかまわない。》

78 苛政「かせい」

厳しい政治。税金、刑罰などが人民にとって酷である政治。

苛政<sup>ハ</sup>猛<sup>ニ</sup>於<sup>リ</sup>虎<sup>ヨリモ</sup>一也。(礼記)

苛政は虎よりも猛なり。

《(税金の重い)むごい政治は虎よりも恐ろしいものである。》

79 京師「けいし」

みやこ。

公如<sup>ク</sup>京師<sup>ニ</sup>。(春秋)

公京師に如く。

《公が都に行かれた。》

三 名詞 (7) 一般 の 2

80 逆旅「げきりょ」

やどや。旅館。旅人を迎える意。「逆」の読みが「ぎゃく」でなく「げき」なのは漢音で読むため。

陽子<sup>ノ</sup>之<sup>キ</sup>宋<sup>ニ</sup>宿<sup>ル</sup>ニ於<sup>リ</sup>逆旅<sup>ニ</sup>。(荘子)

陽子宋に之き、逆旅に宿る。

《陽子が宋の国に出かけ、宿屋に泊まった。》

81 乾坤「けんこん」

天地。乾が天、坤が地。

吳楚東南<sup>ヲ</sup>、乾坤<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>夜<sup>ニ</sup>浮<sup>カフ</sup>。(杜甫・登岳陽樓)

吳楚東南は、乾坤日夜浮かぶ

《(この湖によって)吳は南に、楚は東に分けられ、(果てしなく広がる水面には)夜も昼も天地の万物が影を浮かべている。》

三名詞 (7) 一般 の 3

82 孝「こう」

祖先によく仕えること。父母を敬愛し、仕えること。

三年無<sup>レ</sup><sub>キハ</sub>改<sup>二</sup>於父之道<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>孝<sup>ト</sup>矣。(論語)

三年父の道を改むる無きは、孝と謂ふべし。

《父が死んでから三年の間父のやり方を変えないものは孝行者と判断してよい。》

83 光陰「こういん」

時間、年月。

光陰者、百代之過客<sup>ナリ</sup>。(李白・春夜宴<sup>二</sup>桃李園<sup>一</sup>序)

光陰は、百代の過客なり。

《時間は永遠の旅人である。》

84 恒産「こうさん」

一定の生活手段。なりわい、生業。

若<sup>レ</sup>民<sup>ノ</sup>、則無<sup>二</sup>恒産<sup>一</sup>、因無<sup>二</sup>恒心<sup>一</sup>。(孟子)

民の若きは、則ち恒産無ければ恒心無し。

《一般の民衆はきまつた生業がなければ、一定不変の道徳心も持ちようがない。》

三名詞 (7) 一般 の 4

85 恒心「こうしん」

一定不変の道徳心。

86 社稷「しゃしよく」

土地の神と五穀の神。国家の最も重要な守り神。転じて国家。

有<sup>リ</sup>民<sup>人</sup>焉、有<sup>二</sup>社稷<sup>一</sup>焉。(論語)

民人有り、社稷有り。

《人民もいるし、社稷もある。》

87 城「しろ」

都市を取り囲んだ壁のこと。内城を城、外城を郭という。転じてまち。日本の大名の住んでいる城とはイメージが異なる。

願<sup>ハクハ</sup>以<sup>テ</sup>二十五城<sup>ヲ</sup>請<sup>レ</sup>易<sup>レ</sup>壁<sup>ヲ</sup>。(史記)

願はくは十五城を以て壁に易へんことを請ぶ。

《どうか十五城(まち)と壁を交換してほしい。》

三名詞 (7) 一般 の 5

88 人間「じんかん」

世間。世の中。日本語の人間 (human being) とは違つ。

願<sup>ハクハ</sup>棄<sup>テ</sup>人間ノ事<sup>ヲ</sup>。(史記)

願はくは人間の事を棄てん。

《俗世間のことは打ち捨てたいものだ。》

89 為<sup>レ</sup>人「ひととなり」

人柄。性質。

荆軻雖<sup>モ</sup>游<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>酒人<sup>ト</sup>乎、然<sup>レドモ</sup>其<sup>ノ</sup>為<sup>リ</sup>人<sup>ト</sup>沈<sup>深</sup>好<sup>ム</sup>書<sup>ヲ</sup>。(史記)

荆軻酒人と遊ぶと雖も、然れども其の人と為り沈深書を好む。

《荆軻は酒飲みと交際してはいるが、しかしその人柄は沈着で読書を好む。》

90 邑「ゆい」

みやこ。くに。むら。

二年成<sup>ス</sup>邑<sup>ヲ</sup>。(史記)

二年邑を成す。

《二年たつと、むらが成立した。》

四 動詞 の 1

91 遊「あそぶ」

でかける。まじわる。たわむれる。「遊学・遊説」等の言葉があるように、日本語の「あそぶ」ではとらえられない部分がある。

遊<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>聖人之門<sup>ニ</sup>。(戦国策)

聖人の門に遊ぶ。

《聖人の門下生となって学問をしに行く。》

92 中「あたる・あッ」

あたる。あてる。的中する。

子曰<sup>ク</sup>、夫<sup>ノ</sup>人<sup>不</sup>言<sup>ハ</sup>、言<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>有<sup>レ</sup>中<sup>ル</sup>。(論語)

子曰く、夫の人は言はず、言へば必ず中る有り。

《孔子があつしやるには、「あの男はめったにものを言わないが、言えば必ず的中を得ているのだ。」と。》

93 過「あやまち」

あやまち、まちがえる。しくじる。

過<sup>チテ</sup>而<sup>不</sup>改<sup>メ</sup>、是<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>過<sup>ト</sup>矣<sup>。</sup>(論語)

過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。

《過ちをしても改めない、これこそ過ちというものだ。》

四 動詞

の 2

94 更「あらたム」

あらためる。変える。

子能ク更<sup>レ</sup>鳴<sup>ヲ</sup>可<sup>ナ</sup>ラン<sup>ニ</sup>矣。(説苑)

子能く鳴を更めば可ならん。

《あなたは鳴き声を改めることができればそれでよい。》

95 諫「いさム」

いさめる。忠告する。直言して目上の者の悪事をやめさせる。

孔子曰ク「忠臣之諫<sup>レ</sup>君<sup>ヲ</sup>有<sup>ニ</sup>五義<sup>ニ</sup>焉。」(孔子家語)

孔子曰く「忠臣の君を諫むるに五義有り。」と。

《孔子が言われた「忠臣が君主を諫めるには五つの意味がある。」と。》

96 詣「いたル」

ゆく。訪れる。到着する。

陳太丘詣<sup>ル</sup>荀朗陵<sup>ニ</sup>。(世説新語)

陳太丘荀朗陵に詣る。

《陳太丘が荀朗陵を訪れた。》

四 動詞

の 3

97 曰「いフ・いはク」

〜が言うには。言うことには。

子曰ク「過<sup>チ</sup>則<sup>チ</sup>勿<sup>ク</sup>憚<sup>レ</sup>改<sup>ム</sup>ル。」(論語)

子曰く「過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ。」と。

《孔子が言うには、「過失があったら速やかに改めるのがよい。」と。》

98 云「いフ」

言う。

牢曰<sup>ク</sup>「子云フ、吾不<sup>レ</sup>試<sup>シ</sup>故<sup>ニ</sup>芸<sup>アリ</sup>。」(論語)

牢曰はく、「子云ふ、吾試ひられず。故に芸あり。」と。

《牢が言うには、「先生が『わたしは世の中に用いられなかったから、多芸になったのだ。』と言われたことがあった。』》

99 以為「おもへラク」

思うことには。〜と思う、考える。

以為<sup>ハ</sup>畏<sup>ル</sup>狐<sup>也</sup>。(戦国策)

以為へらく狐を畏るるなりと。

《狐を恐れていると思ったのである。》

四動詞 の4

100 居「おル」ト「

くたつて。経過して。

居ルト数日、項羽引レ兵ヲ西シ、屠リ咸陽ヲ、殺シ秦ノ降王子嬰ヲ、焼ク秦ノ宮室ヲ。(史記)

居ること数日、項羽兵を引き西し、咸陽を屠り、秦の降王子嬰を殺し、秦の宮室を焼く。《数日たつて、項羽は兵を率いて西に向かい、咸陽を攻め滅ぼし秦の降伏した王の子嬰を殺し、秦の宮殿を焼き払った。》

101 膾炙「かいしヤス」

なますと、あぶりにく。人々の口にのぼり、もてはやされること。

有下遊ニ芳野ニ詩十数首上、頗膾炙人口ニ。(近世先哲叢談)

芳野に遊ぶの詩十数首有りて、頗る人口に膾炙せり。《芳野山に遊ぶ詩十数首あつてかなり人に知られもてはやされている。》

四動詞 の5

102 叩頭「こうとうス」

ぬかずく。頭を地にたたきつけておじぎをする。

叩頭請罪。(皇朝史略)

叩頭して罪を請ふ。

《額を地につけておじぎをして自分の罪を罰せられることをお願いした。》

103 対「こたフ」

お答えする。主として、目下の者が目上の者に対して返答するとき用いる。

子曰ク、賜也、女以予為多学而識之者ト。対曰ク、然。

非与。(論語)

子曰く、「賜や、女子を以て多く学びて之を識る者と為すか。」と。対入て曰く、「然り。非か。」と。

《孔子が言われるには、「賜よ、お前は私のことをたくさん学んでそれをおぼえている者だ」と思っているのか。」と。お答えして言うには、「そうです。そうではないのですか。」と。》

四 動詞

の 6

104 弑「しいス」

殺す。目下の者が目上の者を殺すときに用いる。

以<sup>テ</sup>レ<sup>臣</sup>ヲ<sup>弑</sup>ス<sup>レ</sup>君<sup>ヲ</sup>、可<sup>レ</sup>タ<sup>謂</sup>フ<sup>レ</sup>仁<sup>ト</sup>乎<sup>。</sup>（十八史略）

臣を以て君を弑す、仁と謂ふべけんや。

《臣下の身分で君主を殺すことは、仁と言えるでしょうか。》

105 除「じよス」

新しい官職に就ける。

尋<sup>イ</sup>テ<sup>蒙</sup>リ<sup>ニ</sup>国<sup>恩</sup>ヲ<sup>、</sup>除<sup>ス</sup>ニ<sup>臣</sup>ヲ<sup>洗</sup>馬<sup>ニ</sup>。 （李密・陳情表）

尋いで国恩を蒙り、臣を洗馬に除す。

《ついで国恩をこうむり、私を洗馬の官に任命された。》

106 前「すすム」

進む。前へ出る。

若<sup>入</sup>リ<sup>前</sup>ニ<sup>為</sup>レ<sup>寿</sup>。 （史記）

若入り前みて寿を為せ。

《お前は中に入り前に進み出て、（沛公の）健康を祝福せよ。》

四 動詞

の 7

107 賜「たまフ」

与える。目上の人が目下の人に物を与える。

坐<sup>ニ</sup>セ<sup>シ</sup>メ<sup>之</sup>ヲ<sup>堂</sup>下<sup>ニ</sup>、賜<sup>フ</sup>ニ<sup>僕</sup>妾<sup>之</sup>食<sup>ヲ</sup>。 （史記）

之を堂下に坐せしめ、僕妾の食を賜ふ。

《之（ここでは張儀をさす）を表座敷の前の庭に座らせ、下男下女の食事を与えた。》

108 足「た<sup>ル</sup>」

ゝすることができる。ゝするに（すれば）十分である。

書<sup>ハ</sup>足<sup>ル</sup>ニ<sup>以</sup>テ<sup>記</sup>ス<sup>ニ</sup>名<sup>姓</sup>ヲ<sup>一</sup>而已<sup>。</sup> （史記）

書は以て名姓を記するに足るのみ。

《文字を書くのは自分の姓名を書くだけで十分なのだ。》

109 誅「ちゆ<sup>フ</sup>ス」

せめる。とがめる。罪をせめて殺す。

將<sup>ニ</sup>義<sup>兵</sup>ヲ<sup>一</sup>行<sup>フ</sup>ニ<sup>天</sup>誅<sup>ヲ</sup>。 （漢書）

義兵を將めて天誅を行ふ。

《義勇兵を引き連れて天誅を行った。》

四 動詞

の 8

110 封「ほうズ」

領地を与えて諸侯とする。

封<sup>ス</sup>「<sup>ニ</sup>黄帝之後<sup>ヲ</sup>於蘇<sup>ニ</sup>」。(礼記)

黄帝の後を蘇に封ず。

《黄帝の子孫を蘇の地の領主とした。》

111 征「ゆク」

行く。

日日力<sup>メ</sup>征<sup>キテ</sup>而不<sup>レ</sup>已<sup>マ</sup>、則<sup>チ</sup>無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>至<sup>ラ</sup>也。(慎思録)

日日力め征きて已まずんば、則ち至らざる所無からん。

《毎日毎日精出して行ってやめることがなければ、ついにはどんな所にも到達されないことはないであろう。》

112 説「よろこブ」

喜ぶ。「悦」に同じ。

小人<sup>ハ</sup>難<sup>ク</sup>事<sup>ヘ</sup>而易<sup>シ</sup>説<sup>ハ</sup>シメ也。説<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>雖<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>道<sup>ヲ</sup>説<sup>フ</sup>也。(論語)

小人は事へ難くして説ばしめ易し。之を説はしむるに道を以てせずと雖も、説ぶなり。

《小人には仕えにくいのが、喜ばせるのはやさしい。喜ばせるのに道義によらなくても喜ぶ。》

五 形容詞・形容動詞

の 1

113 殆「あやふシ」

あぶない。危険である。

知<sup>レ</sup>足<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>辱<sup>シ</sup>知<sup>レ</sup>止<sup>マ</sup>不<sup>レ</sup>殆<sup>フ</sup>。(老子)

足るを知らば辱しめあらず、止まるを知らば殆ふからず。

《どの程度で満足すべきかを知らば屈辱を免れ、どこでとどまるべきかを知らば危険なめにあわない。》

114 衆「おほシ」

多い。

清盛曰<sup>ク</sup>「彼衆<sup>ク</sup>我寡<sup>ナシ</sup>。我且<sup>ラ</sup>避<sup>ケ</sup>之<sup>ヲ</sup>四国<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>謀<sup>ラ</sup>再<sup>テ</sup>拳<sup>ヲ</sup>」。(日本外史)

清盛曰く、「彼は衆く我は寡なし。我且らく之を四国に避け、以て再拳を謀らん。」と。

《清盛が言うには、「相手は兵力が多く、吾が方は兵力が少ない。私はしばらく四国に逃れて再拳を謀ろう。」と。》

五 形容詞・形容動詞

の2

115 難「かたシ」

難しい。しじこい。

少年易<sup>ク</sup>老<sup>イ</sup>学難<sup>シ</sup>成<sup>リ</sup>。 (朱子・偶成)

少年老<sup>イ</sup>易<sup>ク</sup>学成<sup>リ</sup>難<sup>シ</sup>。

《少年はまだ若いと安心してしているとすぐに年をとってしまいが、学問はなかなか完成し難いものである。》

116 罔「くらシ」

無知なさま。ぼんやりする。

学<sup>ビ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>罔<sup>ク</sup>。 思<sup>ヒ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>学<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>殆<sup>シ</sup>。 (論語)

学<sup>ビ</sup>て思<sup>ハ</sup>はざれば則<sup>チ</sup>罔<sup>ク</sup>、 思<sup>ヒ</sup>て学<sup>ハ</sup>はざれば則<sup>チ</sup>殆<sup>シ</sup>。

《学んでも考えなければ、はっきり理解できない。考えても学ばなければ、確かなものにならない。》

五 形容詞・形容動詞

の3

117 鮮・寡「すくナシ」

少ない。

巧言令色、鮮<sup>ナシ</sup>矣<sup>仁</sup>。 (論語)

巧言令色鮮<sup>ナシ</sup>仁。

《口先だけつまいことを言ったり、うわべだけ愛想よくにこにこしている人には、少ないものだ仁の心は。》

118 工「たくみナリ」

たくみである。巧。

帝<sup>工</sup>書<sup>善</sup>画<sup>画</sup>。 (南史)

帝<sup>工</sup>に工<sup>タクミ</sup>にして画<sup>カク</sup>を善<sup>ク</sup>くす。

《帝は書が上手で絵を描くことも達者である。》

119 碧「みどりナリ」

おお。みどり。おおみどり。

江碧ニミチ鳥逾白ク 山青ウツチ花欲ス然エント (杜甫・絶句)

江碧ニミチにして鳥逾イ白ク 山青ウツチくして花然エンんと欲ス

《江の水は深い緑色で、その中で鳥はますます白く見え、山は青々としてその中で赤い花が燃えるように咲いている。》

120 易「やすシ」

たやすい。ししがちである。

子曰ク、「君子易ハ事シ而難キ説セ也ト」 (論語)

子曰ク、「君子は事へ易くして説はせ難きなり。」と。

《孔子がおっしゃた「君子は、君主として使えるのはやさしいけれども、その喜悦を得るのは難しい。」》

121 少「わかシ」

若い。

管仲ハ少キ時常ニ与ニ鮑叔牙一游ブ。(史記)

管仲は少き時常に鮑叔牙と遊ぶ。

《管仲は若い頃、常に鮑叔牙と交際していた。》

六 副詞

の 1

122 拳「あゲテ」

全部。こぞって。

拳レ蒙ル恩ヲ。(後漢書・孔奮伝)

拳を挙げて、恩を蒙る。

《拳じゆうこぞって恩をこごむっている。》

123 敢・肯「あへテ」

思い切って…する。…しむつとする。

この二つの「敢・肯」は同じように用いられるときもあるが、厳密には次のような区別がある。

敢…あえて、押し切つてする。

肯……することを望む、承知する。

非スレ不ニ敢ヘ言ハ一 乃チ不ル肯ヘ言ハ一 爾。(皇朝通紀)

敢へて言はざるに非ず。乃ち肯へて言はざるのみ。

《言う勇氣がないのではない。そうではなくて言つことを望まないのである。》

六 副詞

の2

124 新「あらたニ」

あたらしく。ししたばかり。ししてまもない。

潦倒新<sup>々</sup> 停<sup>ム</sup>濁酒<sup>ノ</sup>杯<sup>ヲ</sup> (杜甫・登高)  
潦倒新<sup>々</sup>に停<sup>ム</sup>む濁酒<sup>ノ</sup>の杯

《近ごろは老いぼれて濁り酒の杯を手にすることさえやめてしまい、ますますなげやりな気持ちになっていく。》

125 或「あるイハ・あるヒト」

ことによつたら、もしかすると。ある人。

馬之千里<sup>ナル</sup>者<sup>ハ</sup>、一食<sup>ニ</sup>或<sup>イハ</sup>尽<sup>ニ</sup>粟<sup>一</sup>石<sup>ヲ</sup>。 (韓愈・雜説)  
馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。

《一日に千里も走るような名馬だと、ことによつたら一食に一石もの穀物を食べ尽くすかもしれない。》

126 聊「いささカ」

ちよつと、ひとまず。かりそめ。

聊<sup>カ</sup>復<sup>タ</sup>得<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>。 (陶淵明・飲酒其七)

《なんとかまああるべき本来の生活を得たと感ずるのである。》

127 忝「いつニ」

いったん、ひとたび。ひとえに、まことに。

忝<sup>ニ</sup>似<sup>タリ</sup>重<sup>ク</sup>有<sup>ル</sup>憂<sup>ト</sup>者<sup>ニ</sup>。 (礼記)  
忝に重ねて憂ひ有る者に似たり。

《まことに重ねがさね不幸が有った者のように見える。》

128 転「うたタ」

いよいよ。ますます。

高談<sup>タ</sup>轉<sup>タ</sup>清<sup>シ</sup>。 (李白・春夜宴<sup>ニ</sup>桃李園<sup>一</sup>序)

高談<sup>タ</sup>轉<sup>タ</sup>た清<sup>シ</sup>。

《俗事に無関係な高尚な会話はますます清らかになっていく。》

129 各「おのおの」

それぞれ。ひとりひとり。

人<sup>各</sup>有<sup>ル</sup>能<sup>レ</sup>、有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>。 (韓愈・上<sup>ニ</sup>張僕射<sup>一</sup>書)  
人各能<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>、不<sup>レ</sup>能<sup>有</sup>。

《人にはそれぞれできることとできないことがある。》

六 副詞

の3

六 副詞

の 4

130 徐「おもむロニ」

ゆつくり。おだやか。しずか。

清風徐<sup>ロニ</sup>来<sup>タリ</sup>、水波不<sup>レ</sup>興<sup>ラ</sup>。(蘇軾・前赤壁賦)

清風徐<sup>ロニ</sup>来<sup>タリ</sup>、水波興<sup>ラ</sup>らず。

《涼風がそよ吹き、波はおだやか。》

131 曾・嘗・常「かつテ」

(以前)したことがある。

吾未<sup>ダ</sup>嘗<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>見<sup>ユル</sup>也。(論語)

吾未<sup>ダ</sup>嘗<sup>ル</sup>見<sup>ユル</sup>を得<sup>ズ</sup>んばあらざるなり。

《私はまだ一度もお目にかからなかったことはありません。(いつもお目にかかっています。》

132 還「かへッテ」

反対に。逆に。あべこべに。

足反<sup>テ</sup>居<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>、首顧<sup>テ</sup>居<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>。(漢書)

足反<sup>テ</sup>上<sup>ニ</sup>居<sup>リ</sup>、首顧<sup>テ</sup>下<sup>ニ</sup>居<sup>ル</sup>。

《足が上にあつて、かえつてあべこべに首が下にある。》

六 副詞

の 5

133 莞爾「かんじトシテ」

にっこりと笑う様子。

夫子莞爾<sup>トシテ</sup>而笑<sup>ヒテ</sup>曰<sup>ク</sup>、割<sup>レ</sup>鶏<sup>ヲ</sup>焉<sup>ク</sup>用<sup>ニ</sup>牛<sup>ノ</sup>刀<sup>ヲ</sup>。(論語)

夫子莞爾<sup>トシテ</sup>として笑ひて曰<sup>ク</sup>、鶏<sup>ヲ</sup>を割<sup>ク</sup>に焉<sup>ク</sup>牛<sup>ノ</sup>刀<sup>ヲ</sup>を用<sup>ム</sup>ん。

《先生はにっこり笑って言われた、「鶏を割くのになんで牛切り包丁がいるのかな。」と。》

134 畢・尽「ことごとく」

みな。ことごとく。

尽<sup>ク</sup>信<sup>ス</sup>書<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>無<sup>キ</sup>書<sup>。</sup>(孟子)

尽<sup>ク</sup>書<sup>ヲ</sup>を信<sup>ズ</sup>れば則<sup>チ</sup>書<sup>無</sup>きに如<sup>カ</sup>ず。

《「書経」の記事にも誤りがあるから、「書経」を全部信じるならば、「書経」なんか無いほうがよい。》

135 屢・数「しばしば」

しばしば。度々。何回も。

数<sup>ク</sup>乞<sup>フ</sup>致<sup>シ</sup>仕<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>允<sup>サ</sup>。以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>望</sup>之<sup>隆</sup>也。(先哲叢談)

数<sup>ク</sup>致<sup>シ</sup>仕<sup>ヲ</sup>を乞<sup>フ</sup>へども允<sup>サ</sup>れず。其<sup>ノ</sup>名<sup>望</sup>の隆<sup>ナル</sup>を以<sup>テ</sup>なり。

《何度も退職を願いでたが許されなかった。彼の名声と人望が高かったからである。》

六 副詞

の 6

136 頃・姑・暫「しばらく」

しばらく。まもなく。わずかの時間。

将ニ欲<sup>セバ</sup>敗<sup>レ</sup>ラント之<sup>ヲ</sup>、必ス姑<sup>ク</sup>輔<sup>レ</sup>ケヨ之<sup>ヲ</sup>。(韓非子)  
之を敗らんと将欲せば、必ず姑く之を輔けよ。

《打ち負かそうと思えば、しばらくの間は、助けよ。》

137 須臾「しゅゆニシテ」

しばらくして。

坐<sup>スル</sup>コト須臾<sup>ニシテ</sup>、沛公起<sup>チ</sup>如<sup>ク</sup>厠<sup>ニ</sup>。(史記)

坐すること須臾にして、沛公起ちて厠に如く。

《すわってからしばらくすると、沛公は立ち上がって便所に行った。》

138 頗「すこぶる」

すこし。かなり。

窮巷<sup>ニ</sup>隔<sup>リ</sup>深<sup>ク</sup>轍<sup>ヲ</sup>、頗<sup>ル</sup>迴<sup>ラ</sup>故人<sup>ノ</sup>車<sup>ヲ</sup>。(陶淵明・讀<sup>ニ</sup>山海經<sup>ニ</sup>)

窮巷深轍を隔つるも、頗る故人の車を迴らす。

《行き止まりの路地は役人の車とは無縁で、すこし友人が訪ねてくれる程度である。》

六 副詞

の 7

139 既「すでに」

もはや、すでに。…した上に。現に…した。

既<sup>ニ</sup>得<sup>テ</sup>隴<sup>ヲ</sup>復<sup>タ</sup>望<sup>ム</sup>蜀<sup>ヲ</sup>。(十八史略)

既に隴を得て復た蜀を望む。

《隴の地を手にいれてしまつとさらにまた蜀の地がほしくなる。》

140 渾「すべて」

すべて。すっかり。

白頭<sup>搔</sup>更<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>、渾<sup>テ</sup>欲<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>ヘ</sup>簪<sup>ニ</sup>。(杜甫・春望)

白頭搔けば更に短く、渾て簪に勝へざらんと欲す。

《白髪頭を掻きむしれば髪がますますすくなくなつて、すっかりかんざしもさせないほびになつた。》

141 径「ただち」

すぐに。

不<sup>レ</sup>過<sup>キ</sup>一<sup>斗</sup>、径<sup>チ</sup>醉<sup>リ</sup>矣<sup>。</sup>。(史記)

一斗に過ぎずして、径ちに酔へり。

《飲むこと(一斗)に過ぎないが、すぐに酔つてしまふ。》

六 副詞 の 8

142 乍・忽「たちまち」

突然。にわかに。不意に。「乍」は重ねて用いると「了したかと思うと了する」という意味になる。

今人乍見<sup>チ</sup>孺子<sup>ニ</sup>將<sup>ス</sup>入<sup>ル</sup>於井<sup>ニ</sup>、皆有<sup>ニ</sup>怵<sup>ル</sup>惻隱之心<sup>一</sup>。(孟子)

今人乍<sup>たちまち</sup>孺子の將<sup>しよしま</sup>に井に入らんとするを見れば、皆<sup>みな</sup>怵<sup>おそ</sup>惻隱の心有らん。

《いまかりに人が子どもが井戸に落ちそうなのをふと見たとすれば、だれでもはっと驚いてかわいそうだという気持ちになるだろう。》

143 会「たまたま」

ちよつどその時。折りよく。

会<sup>たま</sup>天大<sup>イニ</sup>雨<sup>フリ</sup>、道<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>通<sup>ゼ</sup>。(史記)

会<sup>たま</sup>天大いに雨ふり、道<sup>レ</sup>不通<sup>ゼ</sup>。

《ちよつどその時大雨が降り、道が不通になった。》

六 副詞 の 9

144 具「ついでに」

くわしく。詳細に。具体的に。

引<sup>レ</sup>手作<sup>二</sup>推<sup>レ</sup>敲<sup>之</sup>勢<sup>与</sup>一、未<sup>ダ</sup>決<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>覺<sup>エ</sup>衝<sup>ル</sup>大尹<sup>韓</sup>愈<sup>ニ</sup>。乃<sup>チ</sup>具<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>。

手を引きて推<sup>すい</sup>敲<sup>こう</sup>の勢<sup>せ</sup>ひを作<sup>な</sup>すも、未<sup>な</sup>だ決<sup>け</sup>せず。覺<sup>あ</sup>えず大尹<sup>たいいん</sup>韓<sup>かん</sup>愈<sup>ゆ</sup>に衝<sup>あた</sup>る。乃<sup>すなは</sup>ち具<sup>ぐ</sup>に言<sup>い</sup>ふ。

《手を引いて押したり叩いたりの仕草を試みたが、まだきまらなかった。思わず、都の長官の韓愈の行列にぶつかってしまった。そこで、詳しく訳を申し上げた。》

145 俱「とも」

ともに。くと一緒に。

今<sup>レ</sup>兩虎<sup>共</sup>鬪<sup>ハバ</sup>、其<sup>レ</sup>勢<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>俱<sup>ニ</sup>生<sup>キ</sup>。(史記・廉頗藺相如伝)

今<sup>レ</sup>兩虎共に鬪はば、其<sup>レ</sup>の勢<sup>せ</sup>ひ俱<sup>とも</sup>には生きじ。

《いま仮に二頭の虎が鬪ったならば、このなりゆきとして二頭ともそろって生きてはいない(どちらかが死ぬ)だろう。》

六副詞

の10

146 遽「にはカニ」

あわてて。いそいで。突然。

其劍自<sup>レ</sup>一舟中<sup>一</sup>墜<sup>ツ</sup>於水<sup>ニ</sup>。遽<sup>カニ</sup>契<sup>ニ</sup>其舟<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「是<sup>レ</sup>吾劍之所<sup>ニ</sup>從<sup>リテ</sup>

墜<sup>ル</sup>。」(呂覽)

其の劍舟 中より水に墜つ。遽かに其の舟に契みて曰く、「是れ吾が劍の従りて墜つる所なり。」と。

《劍が舟から水中に落ちた。あわてて乗っている舟に印をつけて言った、「ここから私の劍が落ちたのだ。」と。》

147 果「はタシテ」

予想どおりに。いったい。もし。

果<sup>タシテ</sup>為<sup>レ</sup>乱<sup>レ</sup>弗<sup>レ</sup>誅<sup>セ</sup>、後<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>子孫<sup>ノ</sup>憂<sup>ヒ</sup>。史記

果たして乱を為して誅せずんば、後子孫の憂ひを為さん。

《もし反逆をやっても誅殺しなかったら、後で子孫の心配の種になるだろう。》

六副詞

の11

148 甚「はなはダ」

はなはだ。たいそう。

馮先生甚<sup>ダ</sup>貧<sup>シ</sup>、猶<sup>ホ</sup>有<sup>ル</sup>一劍<sup>一</sup>耳。史記

馮先生は甚だ貧しけれども、猶ほ一劍有るのみ。

《馮先生はたいへん貧乏であるが、それでもまだ一振りの劍だけを持っている。》

149 窃「ひそカニ」

こっそりと。おそれながら。

弟子皆竊<sup>カニ</sup>罵<sup>ル</sup>。史記

弟子皆竊かに罵る。

《弟子たちはみなこっそりと罵っていた。》

150 方「まさニ」

ちょうど、その時。いまや。

関<sup>カニ</sup>法、鷄<sup>キチ</sup>鳴<sup>キテ</sup>方<sup>ニ</sup>出<sup>ダス</sup>客<sup>ヲ</sup>。十八史略

関の法、鷄鳴きて方に客を出だす。

《関所の規則では、夜明けに鷄が鳴いてそこではじめて旅人を通すことになっていた。》

六 副詞

の 12

151 尤「もつとモ」

もつとも。はなはだ。ずばぬけて。

其ノ西南ノ諸峰、林壑尤モ美ナリ。(歐陽修・醉翁亭記)

其の西南の諸峰、林壑尤も美なり。

《その西南の諸峰のなかでは、林壑がずばぬけて美しい。》

152 固・素「もとヨリ」

もともと。元来。

子曰ク、「然リ。固ヨリ相ケル師之道也。」(論語)

子曰く、「然り。固より師を相くるの道なり。」と。

《孔子がおっしゃった、「そつだ。元来そつするのが(盲目の)音楽家を補佐する方法なのだ。」と。》

153 差・稍・良・少「やや」

多少。すこしは。

雖モ有ニ篤厚之人、不レ能レ不ニ少衰一也。(小学)

篤厚の人有りと雖も、少衰へざることは能はず。

《よほど人情の厚い人がいても、(恩愛が)多少は衰えないではいられない。》

六 副詞

の 13

154 漸「ようやく」

だんだん。しだいに。

然リ而テ吾所ニ以能ク漸先レ彼ニ而進ル一者何ソ也。(進学諭)

然り而して吾能く漸く彼に先んじて進める所以の者は何ぞや。

《それにもかかわらず、私がしだいに彼らを追い抜いて先に進んだのはどついつわけであらうか。》

155 纔・才「わずかに」

やっと。すこし。

初メ極メ狭ク、纔ニ通ル人ヲ。(陶淵明・桃花源記)

初めは極めて狭く、纔に人を通ずるのみ。

《初めは非常に狭くて、やっと人が通れるくらいである。》

七助字 の1

156 相「あひ」

「たがいに、ともどもに。あいてを（に）（と）する。（一方向的に）

遂<sup>ニ</sup>相<sup>レ</sup>与<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>友<sup>ト</sup>。（莊子）

遂に相与に友と為る。

《かくしてお互い同士が友になった。》

明月来<sup>リテ</sup>相照<sup>ラス</sup>。（王維・竹里館）

明月来りて相照らす。

《明月がやってきてこちらを照らしてくれる。》

157 所謂「いはゆる」

いわゆる。言つところの。

所謂大臣<sup>ナル</sup>者。（論語）

所謂大臣なる者。

《いわゆる立派な臣下というものは》

七助字 の2

158 今「いま」

今。現在。話題転換。仮定。ちょうど。さて。ところで。もし。

今人<sup>乍</sup>見<sup>レバ</sup>孺子<sup>ノ</sup>将<sup>ニ</sup>入<sup>ニ</sup>於井<sup>ニ</sup>、皆有<sup>ニ</sup>怵<sup>レ</sup>惻隱之心<sup>ニ</sup>。（孟子）

今人乍ち孺子の将に井に入らんとするを見れば、皆怵惻隱の心有らん。

《いまかりに人が子どもが井戸に落ちそうなのをふと見たとすれば、だれでもはっと驚いて

かわいそつだという気持ちになるだろう。》

159 於「（お）の」

時・場所・起点・対象・目的・比較・受身などを表す。「おいテ」「おケル」と読むこと

もあるが、置き字として読まないことの方がずっと多い。

青<sup>ハ</sup>出<sup>テ</sup>於藍<sup>ヨリ</sup>、而青<sup>シ</sup>於藍<sup>ヨリモ</sup>。（荀子）上…起点、下…比較（

青は藍より出でて、藍よりも青し。

《青色は藍から作り出されたものであるが、藍よりも青い。》

七助字

の3

159 於「(お)」の2

勞<sup>スル</sup>心<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>治<sup>メ</sup>人<sup>ヲ</sup>、勞<sup>スル</sup>力<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>治<sup>メ</sup>於<sup>ル</sup>人<sup>ニ</sup>。(孟子)……受身

心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。

《心を使う者は人を治め、力を使うものは人に治められる。》

隱<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>首陽山<sup>ニ</sup>。(史記)……場所。

首陽山に隠る。

《首陽山に隠遁した。》

於<sup>テ</sup>諸侯之約<sup>ニ</sup>、大王当<sup>ニ</sup>關中<sup>ニ</sup>。(史記)

諸侯の約に於て、大王当に關中に王たるべし。

《諸侯間の約束では、大王様は關中に王としていられるべきです。》

160 如<sup>レ</sup>此<sup>・</sup>如<sup>レ</sup>是<sup>・</sup>若<sup>レ</sup>此<sup>・</sup>若<sup>レ</sup>是<sup>・</sup>如<sup>レ</sup>斯<sup>・</sup>若<sup>レ</sup>斯「かくのごとし」

このようである。

若<sup>ク</sup>是<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>夫子過<sup>ニ</sup>孟賁<sup>ニ</sup>遠<sup>シ</sup>矣。(孟子)

是くの若くんば則ち夫子孟賁に過ぐるごと遠し。

《もしそうであるならば、先生(の勇氣)は(昔の勇士である)孟賁よりはるかにすぐれている。》

七助字

の4

161 蓋「けだシ」

おそらく。思うに。推測する語である。

蓋<sup>シ</sup>有<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>而<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>之<sup>者</sup>。(論語)

蓋し知らずして之を作る者有らん。

《おそらくもの知りでもないのに創作するものもあるだろう。》

162 維「これ」

これ。それ。調子を整えるために用いることもある。

邦畿千里維<sup>レ</sup>民<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>止。(詩經)

邦畿千里維れ民の止まる所。

《天子の直轄地は千里四方で、人民の安住している地である。》

163 諸「これ」の1

文中にあるとき、「之於」に等しい。

出<sup>ニ</sup>諸<sup>ヲ</sup>懷<sup>中</sup>。(十八史略) = 出<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>懷<sup>中</sup>。

諸を懷中より出だす。

《それを懷中から取り出した。》

七助字

の5

163 諸「これ」の2

文末にあるとき、「之乎」に等しい。

一言<sup>ニテ</sup>而可<sup>ニ</sup>以<sup>キト</sup>興<sup>ス</sup>一<sup>レ</sup>邦<sup>ヲ</sup>。有<sup>レ</sup>諸<sup>シ</sup>。 (論語) = 『有<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>乎。』

一言にして以て邦を興すべきこと。諸れ有りや。

《ただ一言で国を興隆させ得るほどのものはあるだろうか。》

164 其「そ・それ」

その。この。単純に名詞を修飾する場合と、従属節の主語となる場合がある。「それ」は強意で用いることが多い。

視<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>以<sup>ス</sup>。觀<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>由<sup>ル</sup>。察<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>安<sup>シ</sup>。人焉<sup>ク</sup>度<sup>サン</sup>哉、

人焉<sup>ク</sup>度<sup>サン</sup>哉。(論語)

其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉くんぞ度さんや、

《その人の振舞いを見、その人の経歴を観察し、その人の落ち着きどころを考察するならば、その人の人柄はどんな人でもかくせない。》

七助字

の6

165 抑「そもそも」

さて。いつたい。発語の字。

豈<sup>ニ</sup>得<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>難<sup>ク</sup>。而失<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>易<sup>キ</sup>歟。抑本<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>成敗之迹<sup>ヲ</sup>一<sup>レ</sup>、而皆自<sup>ニ</sup>於人<sup>ニ</sup>一<sup>レ</sup>歟。(五代史)

豈に之を得るは難くして之を失ふは易きか。抑其の成敗の迹を本ぬるに皆人によれるか。

《なんと天下を手に入れることは困難で、それを失うことは容易なのであるうか。それとも其の成功と失敗のあとをよく考えてみると、それらはみな人事によるものであるうか。》

166 所「ところ」

用言を体言化する。……すること、もの。行為の対象を表すことが多い。

富<sup>ト</sup>与<sup>ハ</sup>貴<sup>、</sup>是<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>ヲ</sup>欲<sup>ス</sup>也。(論語)

富と貴とは、是れ人の欲する所なり。

《富と身分の高いことは、人の望むことである。》

七 助字

の 7

167 用「もつて」

くを。くで。くに。くによつて。「以」に同じ。

寄<sup>ス</sup>レ言<sup>ヲ</sup>撰<sup>シ</sup>生<sup>ノ</sup>客<sup>ニ</sup>試<sup>ミ</sup>用<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>推<sup>サ</sup>。(謝靈運・詩)

言を寄す撰生の客に試みに此の道を用つて推せと。

《生を養おうとする人に告げる「この道をおしひろめてやってみられよ。」と》

168 已矣(乎夫哉)「やんぬるかな」

もうだめだ。もはやこれまで。

已<sup>ヌ</sup>矣<sup>ハ</sup>乎<sup>ニ</sup>夫<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>。寓<sup>ニ</sup>形<sup>ヲ</sup>宇<sup>内</sup>ニ復<sup>タ</sup>幾<sup>時</sup>。(陶淵明・歸去來辭)

已んぬるかな、形を宇内に寓すること復た幾時ぞ。

《ああよくよするのにはもうやめよう。この世に生きながらえるのはこの先どれほどだろうか。》

169 所以「ゆゑん」

わけ。こと。もの。大別して、原因・理由を表す場合と、手段・方法を表す場合がある。

江<sup>海</sup>ノ所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>能<sup>ク</sup>為<sup>ル</sup>百<sup>谷</sup>ノ王<sup>一</sup>者<sup>ハ</sup>、以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>善<sup>ク</sup>下<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>。(老子)

江海の能く百谷の王たる所以の者は、其の善く之に下るを以てなり。

《大河や大海が多く川の王でいられる理由は、それがよく多くの川の下にいるからである。》

七 助字

の 8

170 能(不能)「よく(あたはず)」

よく…ことができる。あたはず…できない。「不」がつくと読みが変わることに注意。

柔<sup>能</sup>ク制<sup>シ</sup>剛<sup>ヲ</sup>、弱<sup>能</sup>ク制<sup>ス</sup>強<sup>ヲ</sup>。(三略)

柔能く剛を制し、弱能く強を制す。

《柔弱な者がかえって剛強な者をおさえることができる。》

171 従「より」

くから。くより。

于<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>沛<sup>公</sup>乃<sup>チ</sup>夜<sup>引</sup>兵<sup>ヲ</sup>、従<sup>リ</sup>他<sup>道</sup>還<sup>ル</sup>。(史記)

是に于て沛公乃ち夜兵を引る他道より還る。

《そこで沛公はかくて夜中に軍隊を率いてほかの道から還った。》

172 因「よりて」

もとづいて。たよつて。その機会に。

宅<sup>辺</sup>ニ有<sup>リ</sup>五<sup>柳</sup>樹<sup>一</sup>、因<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ス</sup>号<sup>ト</sup>焉<sup>。</sup>(陶淵明・五柳先生伝)

宅辺に五柳樹有り、因りて以て号と為す。

《家の周囲に五本の柳の木がある。それにちなんで号とした。》